

中古中世新出シク活用形容詞の語構成

于 艶麗

1. はじめに

形容詞は、上代語からその種類にはク活用とシク活用があり、ク活用をする語は情態的な属性概念を表すことが多く、シク活用は情意的な意味を含む傾向があると指摘されている。形容詞の情意性とその形態活用との秩序ある対応関係は、上代語において、非常に特徴ある造語形式である。

平安時代末期になると、連体形の終止用法が広まり、古代語形容詞の連体形が終止連体形となり、「～き」から「～い」へと変化することによって、ク活用とシク活用との区別の消滅という変化が生じた。現代語には「～しい」型形容詞が多く見られ、上代から近代まで、シク活用はどれだけ造語能力を保持し続けているのか。本稿では、古代語と近代語とを分ける室町時代を境目として、平安時代の古代後期から室町時代までの流れを大きく「中古・中世」として捉え、その時代におけるシク活用形容詞の語構成の変化を考察してみたい。

2. 上代語シク活用形容詞の語構成

『時代別国語大辞典上代編』（1967）に収録されているク活用形容詞は156語であり、シク活用形容詞は142語である。そもそも、形容詞そのものの厳密に言えば、接辞「し」の添加による派生語であるため、単純、派生、複合の分類には対応しにくい。語幹の構成を考察しやすいように、この分類によって記述する。疊語の特殊な複合法である性質を考慮し、便宜的に疊語形容詞を特殊な複合形容詞として扱うことにする。上代語シク活用形容詞の語構成の特徴は、次のようである。

単純形容詞の語構成からみると、ク活用形容詞が5割、シク活用形容詞が7割に達している。シク活用単純形容詞99語のうち、「語基+し」は約五割の51語で、動詞と同源の形容詞は20語で、「動詞未然形（被覆形）+し（はし）」は41語もあった。情意的意味を表す語基を持つ形容詞、動詞から派生した形容詞はほとんどシク活用すると言える。

派生形容詞の語構成から見ると、ク活用形容詞は、接頭語と接尾語による派生形容詞は50語もあった。これに対して、シク活用形容詞は接辞による派生形容詞は極めて少なく、「ものかなし」などのわずか4語であった。ク活用と比べて、シク活用形容詞と接辞との結合は未発達の状態であったと考えられる。

複合形容詞の語構成から見ると、ク活用形容詞は32語、シク活用形容詞は18語（疊語形容詞を除く）あり、両方とも上代からよく用いられるように見えるが、シク活用形容詞の場合、複合はいくつかの語彙に限られている。また、疊語形容詞はク活用には見当たらず、その20語はすべてシク活用する。

上代語シク活用形容詞は、情意的語基の意味が重視され、単純形容詞の割合が大き

い。動詞から転ずるものが多く、疊語形容詞があり、派生形容詞が未発達であるなどの点で、確かにク活用形容詞と大きく異なり、その発生・発達が遅れているように見える。

3. 平安時代新出シク活用形容詞の語構成

『時代別国語大辞典室町時代編』（1985～2000）に収録されているシク活用形容詞は484である。また、『日本国語大辞典』（2001）に収録されている「しい」型形容詞は897語である。その最も古い挙例によって、合わせて492語は平安時代から室町時代末までの八百年の間に現れたと見られる。その中で、最も古い挙例が平安時代に遡れるものは146語、鎌倉時代に遡れるものは45語、室町時代以降のものは179語である。残り122語は用例の記載がないため、具体的な出現時期が確認できなかった。ここで、出現時期が確認できるものを挙げて、中古中世シク活用形容詞の語構成特徴を考察してみる。

平安時代新出シク活用形容詞147語のうち、単純形容詞は47語であり、疊語形容詞の44語を含め複合形容詞は61語である。また、派生形容詞は、接頭語による12語と、接尾語による16語を合わせて28語もある。シク活用における合形成容詞の発展は、早くも平安時代から始まったと考えられる。

具体的にみると、単純形容詞の中で、特に注目するのは、情意性の高い語基の減少である。「語基＋し」はわずか11語であり、そして、その中で情意を表す語基は「むつかし」の1語だけである。「動詞未然形（被覆形）＋し」は28語であり、上代と同じく心理状態や思考など多様な動詞から形容詞を派生させている。

また、上代から存在した疊語形容詞も多く現れた。この造語形式は平安時代に入ると、より広い語彙範囲に用いられるようになった。たとえば、上代「わきわきし」の1語しかなかった「動詞の重複＋し」も7語に増加した。このほか、名詞と形容詞語幹の重複もそれぞれ16語と9語の新出語が見られた。疊語形容詞と比べて、「名詞＋形容詞」の増量はそれほど目立たなかったが、「うら」と「くはし」の衰弱に伴い、より多くの語の複合が現れた。

そして、最も注目されるのは、上代にはほとんど見られなかった、接辞による派生形容詞の大量出現である。上代から存在した接頭語「もの」も造語力を発揮するほかに、今までになかった接尾語「めかし」、特に「がまし」の出現は重要である。

4. 鎌倉時代新出シク活用形容詞の語構成

『日本国語大辞典』（2001）の最も古い挙例によって、出現時期が鎌倉時代と確認できたのは45語である。平安時代や室町時代と比べて、語数はかなり少ないようである。単純形容詞14語の中で、「語基＋し」は「いし」と「はばし」の2語のみで、8語は「動詞未然形（被覆形）＋し」である。動詞は「痛む」「苛立つ」「慕う」「嘆く」「妬む」「忌む」のような情意的意味を表すものが多い。疊語形容詞は13語あり、形容詞語幹の重複が多く、名詞の重複は3語だけであるが、「愛愛し」と「福福し」のように字音の重複による形容詞が出現するとともに、「げにげにし」のような副詞の重複も見られるようになった。

派生形容詞では、接尾語「がまし」が引き続き多く用いられる。また、鎌倉時代において、接尾語「らし」は「愛らし」の1語のみが見られた。ただし、接尾語「らし」は室町時代に入ってから多用されるようになり、『日本国語大辞典』（2001）の接尾語「らしい」の項目に最も古い挙例は1477年である。個別的に早く出現した「愛らし」の「らし」が接尾語としての存在が認められるべきかどうかは少し疑問に思われる。

5. 室町時代新出シク活用形容詞の語構成

『日本国語大辞典』（2001）の最も古い挙例によって、出現時期が室町時代（安土桃山時代を含む）に特定できるのは179語である。室町時代新出シク活用形容詞の語構成について、まず、単純形容詞からみると、それまで多用された「動詞未然形（被覆形）＋し」といった語構造の割合が少なくなった。「あやうしい」「おおしい」「ちかしい」「ふかしい」「ふるしい」のようなク活用形容詞から転ずるもの、「いよし」「きつとしい」「なにとやらしい」「よたたし」のような副詞から転成したものが前代よりも多く見られた。そして、単純形容詞全体の割合も少なく、五分の一近くの35語である。

また、疊語形容詞は27語があり、和語が多く用いられるが、「どくどくし」「そうぞうし」「てふてふし」「ぎやうぎやうし」「ぞうぞうし」など、漢語によるものも見える。そして、「うれしがなし」「おもしろをかし」のような「形容詞語幹＋形容詞」が現れ始めたことも注意される。

派生形容詞を見ると、接頭語は「もの」によるものは見当たらず、「こ」によるものは4語あった。そして、「うそ恥づかし」「真新しい」などが用いられるようになり、シク活用形容詞と程度を表す接頭語の結合も見えるようになった。接尾語「がまし」を付く名詞には、「愛敬」「意見」「隔心」「分別」「油断」などの漢語が見られる。そして、接尾語「らし」による派生形容詞は32語もあり、「がまし」に劣らない造語力を持っている。ただし、「ばけらしい」のような動詞に接続するのは極めて少ない。「らし」のほかに、「くろし」と「らかし」も現れたが、それほどの造語力を持たなかった。

6. おわりに

中古中世において、「語基＋し」といった基本造語形式は優勢を失い、特に情意を表す語基が激減した。ク活用形容詞では「名詞＋形容詞」が増加し、シク活用形容詞では疊語形容詞が増加するとともに、派生形容詞が発展したことが注目される。中古から中世にかけて、形容詞語構成の特徴として現れるのは、複合と派生によって、合成形容詞が大量に産み出されたことである。平安時代から室町時代末までに現れたシク活用形容詞はおおよそ492語であり、そのうち、接頭語や接尾語による派生形容詞は150語を超える（上代は4語のみ）。また、「名詞＋形容詞」の構造をとる複合形容詞と、「あらあらし」のような特殊複合法による疊語形容詞の語数も、それぞれ上代の三倍と五倍になっている。要するに、合成形容詞の発展がとりわけ注目されるのである。

上代において、基本的にク活用形容詞とシク活用形容詞の間には整然とした対立構

造が保たれている。ところが、中世に入ると、こうした厳密な語構造は緩んできく。名詞・動詞・副詞・形容詞・形容動詞など、多くの語基が直接にシク活用形容詞の語幹に現れるようになった。畳語形容詞は一層使用範囲を広げる一方、「がまし」「らし」などの接尾語によって、「名詞＋し」などの語基の情意性に対する要求や畳語形の音節数の制約から解放され、更なる多様な語基がシク活用形容詞の語幹に現れることが可能となった。

上述したように、情意的意味を表す語基の減少、その他の多様な語基の発展、合成形容詞の大量出現という事態に伴って、形容詞の活用において変化が生じることとなった。上代におけるク活用形容詞とシク活用形容詞の秩序ある対立関係の緊張は次第に緩んできく。鎌倉時代以降、ク活用からシク活用に变化した語、あるいは一時的に両方の活用をする語が現れた。さらに、室町時代において、連体形のイ音便形が終止形の機能を兼ねるようになり、ク活用・シク活用の区別が消滅したのである。もう一つ注目されるのは、主に鎌倉時代から漢語もシク活用形容詞の造語に用いられるようになった点である。直接にシク活用形容詞の語幹には現れないが、畳語形容詞や接尾語「がまし」「らし」による派生形容詞に多用されるようになった。

【参考文献】

- 『時代別国語大辞典上代編』（1967）三省堂
『時代別国語大辞典室町時代編』（1985～2000 年）三省堂
『日本国語大辞典』（第二版）（2000～2001 年）小学館
阪倉篤義（1966）『語構成の研究』角川書店 第六版
柳田征司（1985）『室町時代の国語』東京堂
釘貫亨（1996）『古代日本語の形態変化』和泉書院
川端善明（1997）『活用の研究Ⅱ』清文堂
斉藤倫明（2004）『語彙論的語構成論』ひつじ研究叢書（言語編）第30巻 ひつじ書房
村田菜穂子（2005）『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』和泉書院
村田菜穂子（2002）「古代語形容詞の造語形式—中古散文の形容詞を中心に—」『帝塚山学院大学日本文学研究』（第33号）
山本俊英（1955）「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」『国語学』23号
沖森卓也（1985）「形容詞の成立」『日本語学』（4-3）
松浦照子（1985）「複合形容詞の形成と継承—平安時代散文作品における—」『国語語彙史の研究六』和泉書院
勝田耕起（1998）「接尾辞ガマシの意味とその変化」『文藝研究』（第145集）
于艶麗（2012）「室町時代におけるシク活用形容詞に関する考察—合成形容詞の語構成を中心に—」『立教大学大学院日本文学論叢』（第12号）
于艶麗（2019）「上代語シク活用形容詞語幹の性質について」『立教大学日本文学』（121号）
于艶麗（2020）『日葡辞書』に見る古代語形容詞語構成の変化』『立教大学日本語研究』（第26号）
日本国語大辞典 ジャパンナレッジ（オンラインデータベース）
日本古典文学全集 ジャパンナレッジ（オンラインデータベース）

表1 上代語ク活用・シク活用語の語構成比較

上代語ク活用	156	上代語シク活用	142
語基＋シ	67	語基＋シ	51
動詞未然形＋シ	7	動詞未然形＋シ	39
		動詞未然形＋ハシ	2
		名詞＋シ	4
		副詞＋シ	3
単純形容詞	74	単純形容詞	99
		名詞の重複＋シ	6
		語基の重複＋シ	11
		形容詞語幹の重複＋シ	2
		動詞連用形の重複＋シ	1
畳語形容詞	0	畳語形容詞	20
名詞＋形容詞	19	名詞＋形容詞	11
語基＋形容詞	6	語基＋形容詞	2
形容詞語幹＋形容詞	2		
動詞連用形＋形容詞	5	動詞連用形＋形容詞	5
複合形容詞（畳語を除く）	32	複合形容詞（畳語を除く）	18
接頭語による派生形容詞	[8]	接頭語による派生形容詞	[2]
カ＋形容詞	2	モノ＋形容詞	2
サ＋形容詞	2		
タ＋形容詞	4		
接尾語による派生形容詞	[42]	接尾語による派生形容詞	[2]
語基／名詞＋ナシ	29	名詞＋グマシ	1
語基＋ケシ	13	動詞連用形＋カハシ	1
派生形容詞	50	派生形容詞	4
その他	0	その他	1

表2 中古・中世新出シク活用形容詞語構成の時代別比較（平安・鎌倉・室町）

語構成		平安時代	鎌倉時代	室町時代	時期未詳
	492	146	45	179	122
名詞＋シ	10	2	1	2	5
語基＋シ	24	11	2	8	3
動詞未然形＋シ	47	25	7	9	6
動詞未然形＋ハシ	12	3	1	0	8
副詞＋シ	7	2	1	4	0
動詞連用形＋シ	2	1	0	1	0
形容詞語幹＋シ	9	2	0	5	2
形容動詞語幹＋シ	12	1	2	6	3
単純形容詞	123	47	14	35	27
名詞の重複＋シ	29	16	3	6	4
語基の重複＋シ	27	7	2	11	7
形容詞語幹の重複＋シ	20	9	6	3	2
動詞連用形の重複＋シ	9	6	0	3	0
形容動詞語幹の重複＋シ	11	5	0	4	2
動詞未然形の重複＋シ	3	1	1	0	1
副詞の重複＋シ	3	0	1	0	2
疊語形容詞	102	44	13	27	18
名詞＋形容詞	42	13	3	14	12
語基＋形容詞	2	1	1	0	0
動詞連用形＋形容詞	6	3	0	3	0
副詞＋形容詞	3	0	1	0	2
形容詞語幹＋形容詞	2	0	0	2	0
複合形容詞（疊語を除く）	55	17	5	19	15
モノ＋形容詞	10	9	1	0	0
イク＋形容詞	1	0	0	1	0
コ＋形容詞	8	1	0	4	3
アイ＋形容詞	2	0	0	1	1
イラ＋形容詞	1	0	0	0	1
オ＋形容詞	1	0	0	0	1
オホ＋形容詞	1	0	0	0	1
ウツ＋形容詞	1	0	0	0	1
ウス＋形容詞	1	0	0	0	1
ウソ＋形容詞	3	0	0	1	2

スエ+形容詞	1	0	1	0	0
ソコ+形容詞	1	0	0	0	1
ソラ+形容詞	2	1	0	0	1
ナマ+形容詞	1	1	0	0	0
マ+形容詞	1	0	0	1	0
接頭語による派生形容詞	[35]	12	2	8	13
ガハシ	2	1	0	1	0
カマシ	3	0	0	2	1
ガマシ	54	9	8	22	15
メカシ	7	4	0	0	3
ラシ	39	0	1	32	6
ラカシ	3	0	0	2	1
カハシ	2	0	0	1	1
クマシ	1	1	0	0	0
クラウシ/クラハシ	3	0	0	2	1
クルシ	2	1	0	1	0
クロシ	2	0	0	2	0
接尾語による派生形容詞	[118]	16	9	65	28
派生形容詞	153	28	11	73	41
その他	59	10	2	25	22
★接尾語「ガマシ」	54				
名詞+ガマシ	40	5	6	17	12
形容詞語幹+ガマシ	1	0	0	0	1
動詞連用形+ガマシ	9	3	1	4	1
語基+ガマシ	1	0	0	0	1
形容動詞語幹+ガマシ	2	0	1	1	0
副詞+ガマシ	1	1	0	0	0
★接尾語「ラシ」	39				
名詞+ラシ	24	0	1	17	6
語基+ラシ	3	0	0	3	0
形容動詞語幹+ラシ	5	0	0	5	0
形容詞語幹+ラシ	4	0	0	4	0
副詞+ラシ	2	0	0	2	0
動詞連用形+ラシ	1	0	0	1	0